

# コスモス

## 反原発運動論

私のリアリズム (13)

向井 孝

28

松永 浩介

18

無人地獄  
前号作品評

西 黒川 杉夫 洋

22 49

### ■ 詩 ■

梅田 智江	近藤 計三	村松 武司	西 杉夫	河合 俊郎	押切 順三	宮田 正平	寺島 珠雄	伊藤 正斉	緒方 宗平	小宮 隆弘
27	21	17	16	15	14	13	12	11	10	9
	向井 孝	申 有人	中野 桂子	野口 清子	和田 英子	姜 舜	高島 洋	長谷川 七郎	直方 十郎	木原 実
	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37

吉田欣一・緒方宗平  
梅田智江・野口清子  
和田英子・木原 実

### ●コスモス雑記

寺島珠雄・暮尾 淳  
近藤計三・伊藤正斉  
秋山 清



かんでらは東京、名古屋、大阪で珈琲屋をやって8年になります。飾り気はありませんが明るい店と清潔なサービスがうりものです。

そのかんでらが信州にきて百姓とロッヂを始めました。ロッヂも珈琲屋同様飾り気なし、手づくりのサービスが方針です。信州の土を耕して3年目。少しの収穫もあがるようになりました。ロッヂではみなさんの食卓にかんでら農場の作品もお出します。

ロッヂ  
かんでら

定価 五〇〇円

第4次 **22** 1979年2月

内田博全詩集の会

吉田 欣一

十二月二十五日に上野公園内の花山亭において『内田博全詩集』出版を祝う会が催された。僕と錦米次郎、伊藤正吉の三人が揃って出席した。会場に入って僕は実に久しぶりに内田博に逢ったわけだが握手しながら内田の顔をつくづく見ると実にいい顔をしていた。全詩集の中にある広瀬常彦さんの油絵で描かれてある内田博像もいい絵だが、この夜の内田博は立派な全詩集を出した人にふさわしい働き続けて来た生活者としてすこぶる健康的で清潔な美しい老いの姿がそこにあった。

この祝う会には全詩集の解説を書いた秋山清をはじめ、松永浩介、大江満雄、伊藤信吉、菅原克己、大瀧清雄、上林猷夫、田村正也、山田今次、中正敏さん、この七三〇頁の全詩集の出版を引うけた青磁社の阿部圭司さん、また『コスモス』の同人たち、息子麟太郎の『方方』の同人、地元福岡県の方から大阪の知人たちと多様な顔ぶれであった。

僕は最初に挨拶してくれと会場で言われた。これは村松武司の陰謀であったと思うが、出版記念の会でスピーチをやる場合は、何時も物議をかもし発言をするので、何もわざわざ東京まで行って恥をかくこともあるまい、内田博よ立派な全詩集が出来てよかったなど、それだけは指名されたら言おうと気安く出席したので年甲斐もなく困ってしまった。

思い出されて、内田の詩は一つのほやきではないかと言ってしまった、はっとしたが、考えてみれば僕もいろいろとほやいているのではないか、と思いついて内田博よ、許せと心の中で思ったが後の祭りとはこのことか。

花のこと

緒方宗平

私も花はすきの方であろうともう。人並みにそうだろうとおもう。花ならどんな花でもいいかといううと大体そうではないかとおもう。なぜなら日本の花の全部、世界の花の全てを見ているわけでもないし知っているわけでもないのだから、また例えすきになれない花、むしろ嫌だとおもう花があったとしても、それも時と場合ですきにならないともかぎらない。だが菊の場合はそうはいかない。無心にその花を眺めるわけにはいかない。それどころかどうしてもある十六の紋章というやつにつながり。つまり土下座、最敬礼、そして兵器のそれ、それによって受けたかかずの痛み、恥かしみ、そ

して生き死にのことがでてくる。それがはげしくでてくる。三十余年たつたいまもそうである。

十一月は菊の季節である。あちこちで展示会がある。百貨店であったり、広場であったり、個人の家の庭であったりする。その催しのピラが貼られたり、新聞の折込みだつたりする。だが私は一度も行って見たことがない。出かけることにはためらいがある、それでは行つたて仕方がない。小児病的なところがあるうかともおもうがこれも仕方がない。

1978. 11

言い訳なしに

詩を書きたい

梅田 智江

いつたいに、詩を書くというこ

とは、自分の感じたことを主張して、それを正当化、普遍化するこ

とであるらしい。読んでひとの握手、拍手が欲しいばかりに、心を砕くといえ、聞かえがいが、わたしはこんなに さびしいのわたしはこんなに なやんでるねえ ねえ わたしを みとめて ちようだいな と、いうことらしい。「自我は膨張された時にはなく 縮小されたときにのみ 現実をみきわめる点となりうる」と、いつたのは江藤淳だったが、そんな、むつかしい言い方をしなくとも、ようするに「詩を書く」ということが、お涙チヨウダイの自己弁護で、自分を売りこむことにつくるのなら、詩をつくるより田をつくれと、いわれでも仕方ないのだ。

現実には それほど甘くない。詩人だなんていわれると、顔にべつたり赤あざを、つけられた気分になる。オナニストですと、天

下に恥をさらしている気持になる。ひよよとした神経をぶらさげて、愛しきものよと頭撫でられ、こんなに敵に、なめられきつて人種もめずらしい。

ロマンだなんていわれると、マロンでも食べて、寝ていてくれといたくなる。「なんのために詩を書くのか」なんて、そんな言い訳なしに、子どもを産むように、オシッコをするように、詩がかけたら、すこしは現実(リアリズム)にきりこめるかもしれない。

朝鮮大学学園祭

野口 清子

十月末の日、留守の間に朝鮮大学の金さんから電話があったと息子が伝える。夜、再び金さんから電話あり、十一月五日の朝鮮大学の学園祭に文学部主催で開かれる詩の朗読会に参加して欲しいということ。

朝鮮大学は、玉川上水の流れる

深い、周囲を雑木林に囲まれたひろびろとした土地に、校舎と学生寮の幾棟かが建つていて、木々の上に澄んだ青空が美しい。

受付から会場に案内されると、朗読される詩がすでに印刷されて朝鮮のうた日本のうたという詩集になつて机の上になり、手廻しのよいのに驚く。許南麒も参加する事になつていたので、「火繩銃のうた」を愛読した事のある私は詩人に会えるのをたのしみにしていったのだが、旅行からの帰りが遅れたというこで残念だった。

日本側の参加者は 詩人会議の城 奥田 山県 近野と私の自作詩朗読と民芸俳優塩野洋子が金芝河の「ソール道」を朗読した。初めに、呉映在「北の終りの駅で」を学生が朝鮮語で朗読した。

夜どうし南へと走ってきた列車北の終点の駅に止り 裂かれた民衆の不幸は 私を押し出す――下りると すべてが切られた ところ

及ぶべき幸せが断ち切られた所  
祖国の最も痛い所に私はきたのか  
私の心は叫ぶ

—行こう、列車よ、前へ

聞く者の心に迫ってくる、ヴォ  
リユームのある美しい言葉にひき  
つけられた。今まで私は朝鮮語が  
こんな美しい事を全く知らなかつた。言葉だけでなく、隣国の文  
化芸術、政治状況に至るまで何も  
知ってはいない。

講堂では映画や歌劇が上演され  
校庭には民族楽器や色鮮やかな民  
族衣裳の展示、即席食堂や売店が  
並んだ、キムチ、朝鮮餅、人蔘酒  
がとよように売られている。

晩秋のさわやかな日ざしの下で  
日本人も朝鮮人もくつろいだひと  
ときをすごした。

## 古びたブロッケン

和田英子

十一月の終りともなると、日暮  
れは早い。勤めの帰り、人通りの

がめて、あらためて感慨をおぼえ  
た。仲間たちとの同人誌と二、三  
のグループの薄い雑誌などにたま  
に書く以外に、詩人としての活動  
に乏しく、詩を書く人たちの交  
流もすくない私にして、このおび  
ただししい詩集を持つのであるから  
詩集の出版は旺盛ということにな  
るだろう。

作詩人口の増大などというはか  
りかたはしたくない。マッスとし  
てはかりえないものが詩であるか  
らだ。それだけに私の棚にあられ  
て私を見つめる詩集群は、おびた  
だしい個性の情念が、野火のよう  
にほむらをあげてひしめいている  
ようにみえる。あるいは春近く、  
下草がきそって萌えでているさま  
にもみえる。詩がさかんな時代の  
あらわれというべきかもしれない。  
しかし詩がさかんに行われると  
いう時代は、あまり良い時代では  
ない。詩人というの、良くない  
時代の鬼つ子のようなものだ。げ  
んに私を見つめる詩集群のどの一  
冊も、この時代の賛歌を書いたも  
のではない。どちらかといえば、反

とだえたくらい道を過ぎ角をまが  
る。前々号(20号)に書いた(ア  
ジサイの花)の無人アパートの前  
へ出る道である。アパートは半年  
前廃屋になって以来表面的な変化  
はなく、シユロやイチヂクの葉が  
垂れたままであったが、あたり一  
面に陰気さが増して行き、見るう  
ちに気が重くなるので、つい違う  
道を通ることが多くなっていた。  
文化住宅三棟、隣りは倉庫で、そ  
の屋根ごしにくろずんだアパート  
が姿をみせる筈である。が、予想  
はずれ、陰気なアパートはきれ  
いさっぱり姿を消していた。二、  
三日前に取りこわれたのだから  
か、八十坪程の空地は新しい土  
がならされ、街灯をうけてしんと  
静まっている。アンテナ、閉じた  
ドア、踊り場の電球、煙突、すべ  
てない。眺め廻すと、「かぎ型の  
塀」がまだ残っていた。遠からず  
こわされるブロッケン塀は、(アジ  
サイの花)で、作者のなかでは欠  
かせられないモノであった。この  
塀にこだわる理由ははっきりして  
いるが、他に伝わらないのは、作

時代に怨念のようなものをさまざ  
まに形象化して、なにかにたちむ  
かう情念のかたまりみたいなもの  
だ。  
なににたちむかうにせよ、鬼つ  
子はたいてい世にいられずふみ  
つぶされるのが相場だ。ふみつぶ  
された鬼の子の涙が、凝って一篇  
の詩となる。鬼哭啾啾だ。

不幸な時代のこの詩集群の集積  
は、そう思うと戦争の時代にひつ  
そりと積みあげられた亡骸の、お  
びたらしい骨片の集積にも似てく  
る。その骨の下からいつも春がく  
ると下草が萌える。その下草もふ  
みにじられる。ふみにじられるた  
めに萌える下草。  
そうかといって、その下草が丈  
をなし、この詩人たちが世にいれ  
られる時代がくるとすれば、それ  
はもつと恐るべき時代だろう。『死  
刑宣告』の恭次郎が「亜細亜に巨  
人あり」と書き、「堅氷到る」を  
書いた光太郎も、『春の岬』の達  
治らとひろく世にうけいれられて  
いった時代のこと、こちらの念  
頭にあるのだが、もともと鬼の子

品批評が言う生活つづり方式的な表  
現の問題ではなく、詩をつくる上  
の考え方の相違だろう。  
詩を「モノにつく方法」として  
捉え今日に至っているが、言葉が  
モノ(現実)につくときは、必然  
的に言葉は雑ばくとなり、言葉の  
精度を高めようとすれば、言葉は  
モノから遊離を始める、という相  
関関係が成り立つ。モノと言葉が  
反作用する緊張した線上に、はり  
つめた力学的な作用が生まれ、す  
ぐれた詩の成立点となるのだが、  
言葉(内部)の力が弱ければ、取  
らばらばらに言葉は散って、収  
拾する余地もない。幾度び、モノ  
(現実)を追い、モノにはね返さ  
れた言葉がブーメランのように自  
身にはね返って来たことか。言葉  
を完成させようと心掛ける詩人と  
は違った次元で、モノに敗れ、さ  
んたんとした言葉の破片に返り討  
たれた事例は、はかり知れない。  
が、当分小さな自分の範囲内で試  
行錯誤し、相変らずの非難を浴び  
ながら(雑ばくな言葉への指摘は  
当誌の批評のみではない。旧知の

が世にいられる天下などという  
ものは、地獄と相場がきまってい  
る。その恐るべき時代の前ぶれの  
ように、詩はさかんなのだろうか。

## 岡本潤年譜の誤植など

寺島珠雄

ようやくできた岡本潤全詩集に  
ついて思うことは多いが、それは  
あとまわしにして年譜の元原稿を  
作つた立場からの訂正などを。

一九〇六年の項(一)のなかに伏  
見墨染とあるのは京都伏見とした  
方が一般に通じやすい。  
一九二四年の項、左京区鹿ヶ谷  
の実家に同居とあるのは妻の実家  
にとする。  
一九二五年の項、母と子と三人  
上京しとあるうち母は妻とあらた  
める。  
一九三一年の項、草野心平詩集  
の題は「明日は天気だ」が正。  
一九三四年の項、思想系検事が  
置かれるは思想係が正。

一九四一年の項、国防治安維持

先輩諸兄姉からも以前から指摘さ  
れている)同じ方法でやるしか  
ない。ひよわな精神(言葉)を、モ  
ノにぶつける無謀に近い方法を。  
情緒に仮託した数行が、ときに褒  
められることを、作者自身の内部  
と照らし合わせ、恥じなければな  
らぬ。

数日を経ず姿を消すだろう古び  
たブロッケン塀を眺めていると、塀  
のかげに消えたスツク靴の女の  
や、バイクで出勤をしていた少年  
の姿がうかぶ。どこへ引越して行  
ったのか、問うてだてではない。

## 下草萌える

木原 実

暮に手もとに溜った詩集類を整  
理してみると、用意した棚にあう  
れた。ざつと数百冊という量であ  
る。大部分が友人やまだ私があつ  
たことのない詩人の寄贈になるも  
ので、それもこの十年ほどのあい  
だに贈られたものである。  
書棚にあられるその詩集群をな

法(全面改変の治維法)公布とあ  
るのは、国防保安法公布と治安維  
持法全面改変公布にわかれる。  
一九四三年の項、淡金堂とある  
のは淡海堂が正。  
一九四四年の項、富山栄とある  
のは富山栄が正。  
とりあえずという範囲で以上の  
諸点を発見した。

また、小野十三郎の献詩「一夜  
の回想」では末尾(五三〇頁の下  
段中央)に「京都にいたきみに出  
したハガキ……」とあるのが誤り  
で、これは東京が正しい。  
○

いずれ何かの形で詳しく書こう  
としていたことの一部を、岡本  
潤潤連なので付け加えよう。  
十月二日(七八年の)のことで  
ある。

校正を一つ終って夜の十一時半  
ごろアパートへ帰った。泊りがけ  
でよそへ行くときは別だが、ふだ  
ん私はドアに鍵をかけない。それ  
で三年間事故はなく、用のある人  
はなかへ入って手紙を書き残した  
りしていた。しかしその晩はドア

を内へ押しひらくなり異様な感じがした。せまい板敷から部屋へ入るところにさげてあったノレン代用の手拭い二枚がなく、部屋(四畳半)に押入れから敷布団を引き出してへんな形にしてある。そのそばに封切り前だった酒の一升びんがカラになって転っている。向うの窓ぎわ、流しでは水道が出しつ放しで、その下に内容物のある大型封筒がいくつ積み重ねられている。すぐ水を停め封筒を流しの横へあげ、布団を広げるとここには一升の酒をぶちまけたらしくズブズブである。むしり取ったノレンと作業ズボン一つも布団のなかで濡れていた。濡れた封筒の方へ戻るとこれは岡本潤資料を分類したものでばかり。といつてすぐに見当のついた「犯人」は岡本にうらみを持つ男ではない。ただそれが手にしやすくてしかも大切そうにしてあったからやつたにきまつていた。

幸いその男がやつてから間なしに私が帰ったらしく水損は回復不能まではなっていないかった。実にくだらない私怨からそんな状態が発

生したわけで、憤りよりは憐憫が、とても相手になってられない嫌悪が、片付けながら私には一杯だった。岡本が生きていたって、これは見舞いに行つての笑いばなしにもならないと思つた。三年間鍵をかけず、夏場はドア自体開放したまま留守にして何のこともなかった部屋が、ついこのあいだまで仲間と思つていた同年輩の男に荒らされたのである。愚劣行為はなお続いたが岡本資料は無事ということだけ。あとはまだ書く気せず。

### 前号作品評のことなど

#### 暮尾 淳

秋山、清水の両氏が発起人になつてくれて、ぼくの「めし屋の風景」のある風景出版記念会を、新宿モツサンの一隅でひらいてくれた。集つてくれたのはコスモス在京同人がほとんど。他には伊藤信吉さん、ワシオ・トシヒコさん、梶原憲之さんらで、ダイクウダイクと都々逸をうたつてくれたのは

ターをしていて、通信科の作品評をやつていたとき、スクーリングで、こんなエラソウな批評するのはどんな奴か顔を見に来た、といわれて、ガツクリしたことがあるだけに、つい同情が先走つてしまふ。さいきんも、部落解放文学賞の詩部門の下読みをやつて、夫々六十数篇に意見を書いたが、そして誠意をつくして書いているつもりだが、いつも文章化した後で、何かかごぼれ落ちているような気がしてしまうのである。表現の貧困さといつてしまえばそれまでであるが、どこかで話セバワカルと

いいたいところがある。そこで、また後になつてしまった、ということも蛇足的に書いてしまつたりする。こんな思いがあるから、いまさらという気がしないでもないが、ぼくの20号の作品「修羅」評で、最後の三行——なお「酸化にくろずんでいく」以下の「いく」を「いる」というふう指摘されたのには、いささかひつかかつてしまった。土中に埋まつていた物質

### 近藤計三

#### ちよつとしたこと

21号の「作品評」を読みながら、なるほど……とも思ひながらも、また一方ではオヤツツという疑問も感じる。

こうした作品評は、云いつ放しなら気安いのだろうが、なまじ文章化されると書く方もつらいだろうな、と同情する。

かつて、大阪文学学校でチユー

松永浩介さん。ぼくは先輩・仲間がありがたさを身にしみて感じたのだったが、そこで出た詩集への批評となると、要するにこれでは物足りない、もつと社会性をとか、反詩への方向をととか、手厳しいものばかりで、詩はうまいだけでは駄目などという当り前のことを、ぼくはかきこまつて小学生のように素直な気持ちで聞いていたのだ。美人の一人からバラをもらつたりして、これは人生で初めてのことに、それから以後は妙にさつぱりしてしまつて、なんとも詩を書く張りが持続しないのである。「前号作品評」をその理由の一つに数えてみたが、それは方便ということ

で、そんなときに寺島雄雄さんの「アホらしいもない」を読む羽目になり、おれもややこしいことにかかわつていのだなど、感慨を新たにした次第である。しかしアホらしいもないといわれてみたつて、これはあくまでも詩の感想をベースにしていることなので、早急に黒白を決める問題でもなさそうだ。「何でも差別の二

が発掘されたとき、大気にふれてたちまち酸化でくろずんでいく、過程の初歩的な科学的知識を、あまりにも詩的イメージ?にとらわれすぎて見落してしまつているのではなからうか、という疑問があつた。いや、詩の問題として考えても、その表現力の拙さをいわれてはどうしようもないのだが——いくという進行形のなかに作者なりの一つのイメージはあつたのだが、ついに届かなかつたか、という口惜しさも残る。

どうも、ぼくの作品では、最後の一行でオクターブが上らないで、逆に下がるところがあるのだろうか。そんな思いもしながら、このすれ違ひの感覚に、ちよつと、いままでこだわっている。

### 暮尾淳・前号作品評

#### 伊藤正奇

私の詩集「乾湿記」のことで暮尾淳さんから批評の手紙をもらいました。その中に「時に詩なんて

字に片寄せる風潮こそが」なんて意見もしてくれているが、それはわが風土では、まだ嫁いびりのほうが多いだろうと、ぼくもそう考えたからなのだ。

それはともかく「花瓶小史」はぼくには欠点の目につく作品で、とりわけ「花を買うのははずかしい」云々は気に入らなかつたのである。ついでにいえば前号の「腹つづみうた」も、ぼくにはつまらない部類にはいる作品だった。

ただしこれはあくまでも、ぼくにとつてはという意味においてである。前号では「腹つづみうた」が一番よかつたという批評も、ぼくには届いているのであつて、だがこのことをさらに腑分けして、批評の絶対性と評価の相対性などという問題に踏みこんでいくがほどの魅力は、ぼくは現在のコスモスの作品にはおぼえないのだ。寺島さんには悪いけれど、この詩人はいまスランプではなからうか。ぼくの知つていられるかぎりではもつとすぐれた作品を書いたはずで、うるせえやこの小僧といわれたと

もうよそうなどと思つたりもするのです。そんな沈んだ気分をかくしてましたので。」と書いてありました。私はこの手紙を前にして、考えこんでしまいました。年がいつもなく。今まで書いてきた詩のなんと空しく、うつろなことか。その暮尾さんに、内田博全詩集出版記念会の夜に逢いました。

暮尾さんにお逢いしたのはこれが二度目、一回目は、私の詩集「火の壁」の出版記念会を、東京銀座の「かんでら」でやつていただいたとき、このときは河合俊郎が悪酔いして大変だったので、誰ともしたしくお話しする暇がありませんでした。十一月二十五日の内田の記念会のおときは、暮尾さんと一と時話す機会をもちました。私が、「詩などどうよそう」とい

う手紙の話もちだしますと、彼は、ううんと言つただけで、外のことしやべりました。そばにいた黒川洋さんも言葉少い人らしく、「しかし彼は」というようなことを言つただけで、私にビールをついでくれました。私は後はきかなくて

もだいたい解るような気がしましたので、問いつめてきこうとは思いませんでした。

二回のコスモス「前号作品評」について、私の作品によせられたものに限って言っておきたい。二十号の「乾濕記」評では、マクロ、ミクロというのは、技術批評的にかたよらないためという観点からの配慮かもしれないが、私自身意外な深読みだと思った。しかし、「全体社会をとらえる眼が不必要であるなど、もちろんいろいろではない。批評の前提としてそれがあっても、しかし作品を書くにさいしては、あくまでも個の抒情のリリズムによって、といいたいのである。なぜなら全体が巨大でふくざつであればあるほど、それはなにかの大きな権力によって、図式化、標語化されている度合いが多いからである」という批評には、少なからぬ反省と示唆を与えてくれました。これは決してこと新しい指摘ではありませんが、私としてはいつも心に焼きつけておきたいことであります。

二十一号の「雉子」評では、「わかりにくい詩である」とあります。そうだろうか、そうにちがいない。それは作者の技術がまずいからもつとわかりやすく書くように努力すべきである。しかし、天皇制復活とか、国鳥である雉子を、晩さん会のために殺すように、彼らは民衆を殺したのである。もしこの通りなら、この詩は絵解き遊びみたいなことではないか。と批評子はここでも深読みと、少々ちがった意味の解釈をしている。詩は意味や観念性だけで批評すると大変ナンセンスなものになりかねません。もつと言葉のもつタマシイ（なんと古風な）のリズムに目をむけていただきたい。

## 年末

### 秋山 清

一九七八年一月二日の夕方から清水清宅に集まった。コスモスの集まりではなかったが同人がその中に六、七人いた、となると

どうもコスモスのことに話が落ちてゆく。そして話が割合理くつっぽくなりやすい。私は隣に坐った西杉夫をとつかまえて、この号に載せた彼（ら）の前号作品評について、その努力を買いながら批評として至らぬと思う点をあげすけにいった。あの批評の形式はぼくがすんで考え具体化していることで、それともなく反批判のよくな空気もじわじわと出ている感じもあり、ここをどう乗り切るか、批評する方もされる方もしつかり腰をおろしてやって欲しいところである。

私のひそかに望むところは、詩の批評の方法の確立である。これまでのところ、コスモスの作品批評は、何だかだといつても、好きときらいをいいわけるところからそう前に出ていない。もう一ついえば好ききらいについての自己弁護程度だ、といつてもそれほどいいすぎではない。コスモスは人民詩精神的批評の立場を確立しなれば外に向かつて大きなことはいえぬし、また同人内部での詩観に

おける相互理解も不可能だということになる。具体的に反論がある場合は、評者個人宛もよいが、なるべく編集部（あるいは同人会）宛にして論争の場に持出して欲しい。

「前号作品批評」の掲載に異論あるいは反対がある場合もそのことを無遠慮に意見発表をすべきだ、と私は心得ている。また東京同人で特に希望する向は合評会に自由に、積極的に出席をするのもいい。同人中の比較的若い連中をこれに当らせてというところにも、少しばかりの意図を感じて欲しい。

そこには、年をとって、詩作品経験の長い者がいい作品をかくものでもないという事実も踏まえ、後進者の作品が必ずしも新しくないという現実をも計算しているつもりだ。一人の詩人については少くとも五篇や十編をまとめての批評が望ましいと思うが、そのうちにそういうことも具体化したい。

(七八・二二二五)

## 誤算

### 小宮隆弘

噴きだすようにながれでるもの

女の性

うわずった妻のことばを抱きよせて

二十五年目の夜を

那覇のホテル

照明うすくひろがっている

レンガ色に調った広い部屋に泊った

一と月前の風涼しい夜

古くなった姿見に顔をおしあてるように

紅棒をひきながら

指折りいく度もかぞえなおした計画に

誤算はなかったが

更年期は

耐えがたくつらいもの

きのうまでの快晴が

今朝からこの悪天候だ

福岡空港へ走るタクシーの中

銀婚旅行の中止はできなかつた

いつもわたしのために不自由をさせる

抱かれて

眼をとじて

それだけの夜を

三泊

九階の窓からはじめてながめる

雨にたたかれていまする夜景

海岸の

防波堤に波は白く

上空では

高度を下げて着陸体制にはいった

ジェット機の点滅する赤い灯がうつっている

十月二十七日

沖繩 風強く雨

# 秋の花

緒方宗平

庭すみのコスモスが

初秋の風にゆれている。

萩の茶屋とよぶ

洒落た峠で

まんじゅしゃげと萩の花が丘を埋めている

という。

いっしょに行く人もいないままにみる

コスモスに小さな蕾がついていた。

いつひらくだろう。

花の咲くころは

高く空がすんで

さらっとした秋風が吹いてこよう。

ピンク、ムラサキ、シロの花。

そして

かさねた馬齢を責めるだろう。

そのために咲くとはおもわないけど

美しいばかりではないようです。

1978. 9. 17

茶の垣根の

さかりをすぎた

サルビア、

なんの秋の花であろう。

胃袋を切りとって

三週間をすぎ

めしがのどをとおらないという、

意しきもさだかならず

やつとのおもいか足を動かすのも。

見ていれば痛々しく。

わき目もふらずに働いて。

女の人よ

目をひらいて

コスモスを見よ、

秋の花

これからの花です。

1978. 10. 3

# 初冬の日

伊藤正斉

今年も年の暮

あてにならない余分というやつをあてにして

かけがいのない自分を値引きする。

水を揚げないうちに

木を伐り

竹を伐っておかねば

と思ひながらすごしてしまふ季節への悔恨のなかで

目にもえない街路樹は枯れ

元始の海苔粗朶に油がしみてゆく。

あげくの果てに

いったんことあるときのためにときた。

それでも人々は出入口の柵を通って

羊のように

滝のように流されて行く。

仕事の袋をかかえて

爆撃で焼けただれた高田の馬場の駅の階段をかけおり

ていった。

そのころの荒んだ風景と

足元をすくう目の前の風景。

頭の上に落ちてきそうな駅の建物。

歩行者天国でにぎわう街のなかからぬけでて西郷さ

んの銅像のあるという暗い石段をのぼって行った。

そこに西郷隆盛の銅像はあった。

どちらが前か うしろかさだかでない。

ななめ前とはどちらか などと

きらめく街の灯をみおろしていた。

暮れやすい冬の日

自失して自己の影さえ見うしなつた方向音痴。

このひととき

おれたちは

上野の森にあつまり

短すぎる時間をわかちあった。

## 無題五章

寺島珠雄

沙魚はぜが生きている。  
海ぞいのまぢの  
海の匂わぬアーケード街T字交点。

二つ実みをつけた柘榴ざざろの枝が

小学校の塀ひから歩道に出ている。

バス停の長椅子にはなぜか老若女ばかり。

塀ひの北に交番。南は公衆便所。

○

つづくので  
かぞえたら十二枚  
幅二メートルのシャッターがおりていた。  
つぶれたパチンコ屋には  
△謹告▽も△ごあいさつ▽もなく。

この洋服屋のおやじは

いつも店頭で奇妙な声をはりあげている。

魚市場ふうであり総理大臣ふうでもあるが

洋服屋ふうではない。

○

手押し車のおばあちゃん魚屋の

○  
駅から駅まで歩いた。十五分だ。  
向うの駅には酔いどれがいて  
こっちの駅にはむらがる鳩がいて  
好きでないのは同じだが  
酔いどれで空を飛べるなら それならいい。

## 雪の町へ

宮田正平

汽車は 喘ぎあえぎ

防雪林の坂を登りつめ

トンネルに入る

漆黒の空を覆って

粉雪が舞い狂い

炭塵と吹雪と

車窓を灰色に塗りこめていた

今は真冬の夜ふけ

県境いのトンネルをぬければ

故里の町は 近い

僕は ついに

ついに 僕は帰ってきた

片時も忘れなかつた父祖の地に

杜父魚や泥鰌や鮒や

少年の日が息づく山川に  
着のみ着のまま  
父母の墓前への花も持たず  
それでも 僕は  
昂然と胸を張り  
雪深い故里の駅頭に  
降り立つのだ  
モンペをはき 藁沓をふんで  
スキーを肩に往き来した  
駅前の道をまっすぐ  
切通しの坂を越えると  
碁盤の目の城下町に入る  
鶴のように長い首の  
癩癩もちの先生は  
元気で鍬をふるっておられるか  
町はずれの橋の袂の駄菓子屋は  
川ぞいの役場の横の栗の木は  
昔のままに 今も  
あるか

## 行方

### 押切順三

畳まではがして  
本・手紙・雑誌・ノートの類、  
三台のリヤカーで運び出した。  
それらをどうした、  
それらをどこでどうした。  
一九四〇年一月二〇日の夜明け、  
松林のなかの加藤家の玄関戸をたたいたのは  
県庁中山警部補ほか私服四名、  
二人は素早く裏手にまわった、  
中山警部補・来てくれれば話がわかるよー  
『北方教育』は潰滅し、  
あれから三十八年たった。  
松林一帯はびっしりの住宅地。  
中山警部補、いまどこにおる

戦争で死んだか、  
生きているか、病み呆けているか、  
—お国のためにな、あいつらを、  
そんなことをほざいているか。  
上官は誰だ、  
もつともつと上の  
戦争を起したのはどこのどいつだ。  
三台のリヤカーでどこに運んだ。  
アルバムを引きさき、  
仲間の顔を赤鉛筆で汚し、  
治安維持法違反と喚いた  
松田警部補、  
いまどこにいる、  
人を見据えるあの眼のままで死んだか。  
三十八年たった。  
あの手先たちはいまどこでどうしているか。  
あのへん一帯、松葉の厚いフェルト、  
三台のリヤカーのゴム輪は、  
その上を通った。

一九七八年二月・加藤周『北方教育物語』による

## 鮫物語

### 河合俊郎

防潮保安林と書いてある立て札は黒ずみ  
一本だけの細い道  
雑木のくらがりを抜け出るとぱっと海が開け  
おれは鮫になる  
痛快だったな  
腹のどまんか食いちぎって逃げたら  
血の水煙がもくもくひろがり  
その果に緑の山がうるんで見えたつけ  
人に食いついたら離さない性を大切に  
おれは戦場へむかった  
ふるさとの海にきらめく遠い過去  
左に河口が見える  
右に大山があった

そこだけが陸へ上がれるただひとすじの道  
波打際でうかがうと  
抱負に胸がふくらみ鰓はあけっぱなし  
再び戻ることもない砂浜に  
印をつけておれは海へ去ったのだ  
あれから三十三年  
久しぶりに村へ帰ったらびっくり仰天  
お寺の裏はビルになり  
高級車が走り  
浜にはテトラポットが並べられてしまった  
ここで育ち  
ここで培われた友情を食いちぎる  
おれの中の鮫も息切れがする



原野のまんなかの高架駅に  
8両の電車が着いたとき、  
いっせいに足音はおこったのだ、  
大きくひろがるくらやみのおく  
巨船の形にもる灯の群にむかつて。  
枯れかけたすすきを分けた道は  
やがてゆるい坂になり、  
男たちはいつきに登りきる。  
大型クレーンが夜空を切つて伸び、  
そのあざやかなオレンジ色を  
工事灯が回転のたびに照らしだす。  
うずたかい土  
水たまりが光り  
ころがつている鉄パイプ。  
男たちはその横を  
足音たかく通りぬける。  
男たちのほか  
前後左右に人かげはない。  
灯がいくらか近づくころ

こんどは急な下りになって  
男たちはどつと降り  
開きかけていた間隔がまたちぢまっている。  
もういちど登りがきて  
灯が大きくなる、  
男たちは足をはやめる。  
ひとことの会話もなく  
順番は歩きだしたまま、  
右手にそろって夕刊が白い。  
雑木林の角を曲ると  
団地入口が見えている。  
男たちはなだれこむように構内へ。  
5階建鉄筋コンクリートにはねかえり  
ざわざわとこだましあう足音。  
手前の棟、そのつぎとすいこまれて  
男たちの数は減り、  
足音だけが近づいている。  
植えたばかりの芝生に  
立入禁止の札が赤く、  
三輪車がひっきりかえった構内歩道に  
足音がひびいている。  
夜が深まる、  
だれもない、  
まだ足音がある。

冬の葉書

村松 武司

雪が降っているんだろう  
高岡で汽車がとまる  
富山県高岡市にて 李錦玉  
そこから葉書が投げられる  
港は横なぐりの吹雪だろう  
あす、正午、伏木港から出航します

すこし度の厚い眼鏡をかけた  
透明な鼻すじの中年の婦人が  
うまれてはじめての船のつて「北」へゆく  
そこに別れた娘たちがいて  
両親は北にも南にも帰れなかったが  
どこにもいなくなったような気がする  
なぜ日本を離れる前の夜になって

最後のわかれのように雪が降るのですか  
わたしは戻ってくるつもりなのに  
両親の旅路のはての日本に  
帰ってくるはずなのに  
なぜ拒絶的に

わからないから 胸がさわぐ  
東京のあなたに手紙 投げる  
わたしの夢をけつしてあなた、わからない  
波濤の先端の国を目前にして  
すでにしてわたしは新しくはならぬ  
新しい娘らをまえにして  
港を發つわたしはあまりにも日本に  
生きた。これは  
親でない、まして両親の子でもない  
みんなの悲しみよりも流浪よりも  
わたし 喪失を生きた  
わたしの指はいま孤独の夢をみる  
普遍の夢を、その指のさきにさぐる  
そのことあなたにはわからない  
黙って伏木を發ちます さようなら